

ま え が き

ある日の朝、突然、登校することをしぶったり、時には、頭痛や腹痛を訴えたりすることがあるが、親としては、欠席の理由がよくわからないので、「どうして学校に行きたくないの?」と問いただしたりすると、ついには起きてこなくなる。なだめすかしても、しかつてもだめで、逃げたり、暴れたりして登校しようとしない。——こうして、発見されるのが「登校拒否」とよばれる子どもである。

本来、子どもにとっては、学校は楽しい場であると同時に、集団の中において、耐性を習得していく場でもあるはずであるが、多数の子どものなかには、保護のない立場におかれると、強い不安におそわれ、その場から逃避しようとする非社会的行動が、最近目立って増加してきている。

「登校拒否」の子どもも、このような非社会的行動の一つとみることができ、こうした現象に、どう対処するかは、学校における今日的な大きな課題の一つになってきている。

当教育センターにおいては、「登校拒否」に関する事例を中心とした研究の成果の一部を、所報等を通して発表してきているが、本年度は、これらの研究を基に、登校拒否の理解と指導について、事例を加えながら、まとめてみた。

本研究が、各学校において、学級担任を初めとして、すべての先生方に活用され、今後の教育相談活動の向上のために、役立つことを願うとともに、「登校拒否」の指導、ならびに発生予防に役立てていただければ幸いである。

昭和54年3月

福島県教育センター所長 佐藤 信久